

---

# やさぐれ勇者血風伝 勇者様はオヤジ！？

土方 真吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やさぐれ勇者血風伝 勇者様はオヤジ！？

### 【Nコード】

N1296Z

### 【作者名】

土方 真吾

### 【あらすじ】

異世界から呼び出された勇者である主人公。そして、勇者様を手助けするべく行動を共にする少女。ごく普通（かな？）のふたりは、ごく普通（っぽい？）の恋をし、やがてごく普通（と言い切れない可能性もあり？）の結婚をします。でも、ただひとつ違っていたのは、勇者様は……オヤジだったのです。このお話には、パロディオマージュリスペクト様々な名目で何処かで聞いたようなネタが含まれます。

また、このおはなしには過激残酷その他もろもろの有害とされる表

現が含まれるかもしれません。含まないかもしれません。  
これだからラノベは子供たちには許せない許さない読ませられない  
などとおっしゃらずに、「あ、このネタ見たぜH A H A H A H A W  
w w」ぐらいの勢いでご笑覧いただけると幸いです。  
勿論、箱入り娘の脳みそがとろけだしたりする副作用はございませ  
ん。タブン。

## Oyajii Meets Girl

「……勇者殿」

今日、朝からの出来事を思い出す。

とは言え、普通に朝飯を食っていて、気が付いたらここにいた。

「…勇者殿？」

ため息を一つ。

仕方ないので軽くこれまでの人生を振り返ってみる。

たいして実りのない人生だった。

家族もおらず、貯金もない。

最近はずっかりメタボ気味な腹と、薄くなった頭が寂しい。

なんだか死にたいほど虚しくなったので遠い目をしてみると、ガツと鈍い音とともに目から火花が出るような痛みが襲った。

と言うか本当に火花でた。チカチカつと。

「つう~~~~~ な、何しやがるクソガキっ」

「さつきから呼んだるじゃろが、クソオヤジ！」

視線を落とせば、何やらねじくれた木の杖をグリグリと押し付けてくる少女が目に入る。

純白の長い髪をなびかせ、ルビーのような透き通る深紅の瞳を大きく見開いて、プリプリ怒っている姿はどこまでも愛らしかった。

コイツがこの杖で向こう脛をひっぱたいたのでなければ、だが。

「いいか、お兄さんは勇者とか言う奇天烈なジョブにはついてないんだ。他を当たってくれ！」

ペシッと杖を払いのける。

「わしだって貴様のようなオッサンが勇者なんて思わんわっ」

払いのけた杖を再び突き付け、少女は偉そうに薄い胸をそらして言った。

「じゃが、召喚呪法は成功しておるのだ！ 貴様がなんであれ、この魔王との戦争を終わらせる鍵」

ジットリと見つめるこちらの視線に、深紅の瞳が自信なさ気に泳ぎ始め、やがてそらされる。

「ノハズ…タブン」

「オイイイ!？」

## 残念な賢者

とりあえず話をまとめとめてみる。

長い間平和に過ごしてきたこの世界は、突如北方に現れた自称魔王の侵略を受けた。

そして……

「人類は滅亡しました!」

「しとらんわーっ!!」って言うか爽やかな笑顔でなんてこと抜かしおるか、このクソオヤジ!!」

怒り狂って襲い掛かる白い少女の頭をわしづかみにして止める。  
この少女はこんななりをしているが、すわい齡三百を越える大賢者、レナンと言うらしい。

「どう見てもただのちびっこだが」

「ちびっこ、言うなーっ!!」

「ハイハイ、賢者賢者…… ふう」  
「ムキーツ!!」

レナンはジタバタともがいて、掴んだ手からようやく脱出すると杖を突き付けてきた。

「ど、どうやら、わしを本気で怒らせたいうようじゃな~~~~~っ」  
「涙目でそんなことを言われても、なあ?」  
「ウヌヌウ!」

実にからかいがいのある少女だ。

「よかるう！　ぬしの旅の連れにと、白魔術師を呼んである。  
そろそろここへ到着する頃合いじゃ。こんがり炙っても、死なぬ  
程度に治せるじやろう！

クツクツク、謝つても容赦せんからの？

魔術の力、存分に味わえイ！」

レナンの雰囲気が一変し、複雑な身振りで杖を振り回す。  
視覚では捕らえられない何らかの力がその華奢な体を巡り始め、  
つややかな唇が唱える呪文が神秘の威力を

「ぴぎやつ！？」

発揮しなかった。

「アホの子だろ、お前……」

何をやったのかと言えば、一步前に出てその頭を拳骨で小突いて  
やっただけである。

衝撃で魔術が詠唱中断くスペルブレイクするのには全世界共通ら  
しい。

「ず、ずるいぞ……」

「ずるいもクソもあるか。」

敵が目の前で呪文を唱えてるのに、なんで黒焦げになるのを黙っ  
て待たにやなんのだ」

右手をワキワキさせながら、涙目で殴られた所をさするレナンの

詰め寄る。

「ま、まで。まだなにかするつもりか！」

「おう。敵にはきつちりトドメをささんとな？」

「て、敵？ カワイイ少女のお茶目な悪戯ではないか。笑って赦すのが大人の男と言うものじゃろう」

顔色を変えて後ずさるレナンにニツコリと微笑んで見せる。

「そうだな……」

「おお、わかつてくれたか。さすがはわしの見込んだ勇者じゃ！」

ホッと安堵の息をもらすレナンに、判決を告げる。

「だが、悪戯好きの子供の躰も大人の義務だ」

ひょいと抱え上げると予想外に軽い。

「え？ え？ え？」

突然のことに真っ赤に頬を染めて動揺しているレナンのスカートをペロツとまくる。

「ちよっ なにをつ」

「子供の躰は尻叩きと相場が決まってるだろ？」

「いやじゃ！ ていうか、変な所触るなクソオヤジ！ みゃあああ  
あああ！！！！」

## 黒魔術師はアホの子でした

始まりはいつも突然、と歌の文句にもあるように、ドアが開いたのはいきなりだった。

「レナン様ー、居ないんで…… す、か？」

どうやら、騒ぎすぎてノックに気付かなかったらしい。

入って来たのは、年の頃16、7ぐらいの少女が二人。

黒髪をキュツとポニーテールに結い上げた気の強そうな方がドアを開けた姿勢のまま固まり、その背中越しに覗き込んだ柔らかそうな金髪の優しい顔立ちの少女の方は、「え？」っと、困惑の声と共に、みるみるうちに真っ赤に頬を染めた。

さて、状況。

ドアを開ければ美少女（自称）が、ムサイオヤジにスカートを捲られ、パンツを半分ずり下げられている。

「君は、ひきつった笑みを浮かべて、

「お取り込み中でしたか、失礼しました」とドアを閉めてもいいし、無言で立ち去ってもいい」

「するかっ この不埒者め！！」

黒髪の少女は電光石火の動きで部屋に飛び込むと、容赦ない平手打ちを叩きこんできた。

「そうですネ。誰だってそうする。俺だってそーする……」

腰の入った平手打ちがいい感じに決まったせいか、クワンクワンとめまいがする。

魔の手を逃れたレナンは、ヨヨヨとわざとらしく泣き崩れる。

「えぐえぐ、嫌だと言つのに無理矢理このクソオヤジが……」  
「な、なんて非道な！」

その言葉に黒髪の少女がますます激昂する。

「うつわ、事実しか言っていないけど汚くないか、それ!？」  
「それにレナンさまも、なんだか楽しそうだったよ？」

こちらの主張も金髪の少女の言葉もまるつきり無視して、ビシリと杖を突き付けてきた。

「どうやら遠慮の必要はなさそうね。この一撃で黒焦げにしてあげるわ！」

同時に複雑な身振りと言文の詠唱がはじまる。  
今はマズイ、ダメージが足に来ている。

「風の乙女よ、その力を」

早く中断させないと……

「荒れ狂え、真空の」

せめて、逃げないと……

「引き裂き、焼き尽くせ」

視界が正常に戻るが、黒髪の少女はまだなにかノリノリで詠唱を続けている。

「……なあ。いつ発動するんだ、これ？」

「うむ、今呪法修飾部分が終わったから、まあ一分くらいかのう」

いつのまにやら、ケロツとした顔でそばに居たレナンが解説する。

「魔術師おまえら全員アホの子だろ……」

黒髪少女の襟首をつまみ上げて外にほうりだす。  
ガチャリと扉に鍵をかけたところで

「稲妻よ、焼き尽くせーっ て、何で外に！？ にゃあああああ！  
！」

「うむ、暴発したようじゃな」

家の外で爆音と悲鳴が上がった。

## 白魔術師はグレイプフルーツがよく似合う

「はじめまして、勇者さま。白魔術師のシロエ・リリンホワイトと申します」

スカートのはしをちよいとつまんで、優雅に一礼した金髪の少女は次に寝室の扉を示す。

「彼女がクロテア・ローゼス、黒魔術師です。

ご無礼をお許してください。

悪い子じゃないんですけれど、ちょっとだけ、その……」

「クロは頭に血が上りやすくてのう」

ポリポリとクッキーをかじるレナンに冷たい一瞥をくると、そっぽを向いて鼻唄を始めた。

魔術の電撃でいい感じに焦げていたクロテアは、シロエとレナンがベッドへ運んで魔術で治療した。

今はシロエのお土産のクッキーとお茶で一息入れたところだ。

「気にしなくていい、状況的に仕方ないだろ。

あと、見た目通りでただのオッサンだ。勇者でもなんでもない」

「うむ、カワイイ美少女がムサイオッサンに襲われておったら、助けるのがアイタタタっ」

レナンの頬をつまみ上げると、シロエは楽しそうに微笑んだ。

「でも、すごいですね」

「なに、ぐああ〜ッ!」

右手に激痛が走る。

レナンが頬をつまむ手を振り払って、逆にかじりついていた。

シロエがクスクスと笑いながらレナンにクッキーを差し出すと、  
「おお、良い口直しじゃ」などと抜かして口を放した。

「ああ、イテエ。歯型ついてるぞ、くそう」

「軽々しく乙女おとめの柔肌を掴むからじゃ!」

「へえー、処女おとめ、ね」

「いやらしい言い方するでないわ、助平親父」

「それですよ、それ」

睨み合っているところに、シロエが割り込んでくる。

「なにがじゃ?」

「レナンさま、自分でお気づきじゃないんですね。」

勇者さまと話してる時のレナンさまは、ものすごく楽しそうですよ?。」

「むっ?。」

「私達とだってそんなに話さないじゃないですか。」

お客さまが貴族でも用事が済んだらすぐ追い返しちゃうでしょう」

レナンは不愉快そうに口をへの字にして、ちらちらとこちらをうかがう。

「い、いや。コヤツ相手だと悪口に遠慮がいらんと云うか、その…」

何やらモゴモゴ呟くレナンに、手のかかる妹を見るかのような優しげな目で微笑んだシロエは、こちらに向かって話しかける。

「今まで魔術師をあいう方法で無力化した人はいません。勇者さまが初めてですよ!」

「……ああ、ソウデスカ。魔術の師匠どもはどんな教育してるんだか」

あまりの脱力感に、がつくりと崩れ落ちてテーブルに頬をつける。一体、この世界はどれだけユルイのだろうか……

「あ。でしたら、お城に行くついでに、アカデミーにお寄りになればいいと思います!」

シロエが少しこちらに身を乗り出すと、なかなかにポリウムのある胸がテーブルの上でムニユ〜と形を変えた。

「グレイプフルツ?」

「このエロ親父め……」

すかさずレナンが耳をつまんでギュツと引っ張る。

シロエは一瞬、きょとんとしたがすぐに気が付いて、胸を抱き寄せるように隠した。

「もう。駄目ですよ、勇者さまったら」

少しだけ頬を染めて、はにかむシロエはむやみやたらに可愛い。

「鼻の下伸ばしすぎじゃ、たわけ」  
「だってよ」

レナンがしつこく耳をぐいぐい引つ張るが、赦す。  
今までの人生で、美少女に囲まれたこんなアレな時間があっただ  
ろうか？

いや、ない。

「レナン様！ シロ！ 無事なの？！」

寢室の扉がドバンと開いて、幸せな時間はあっさりと終わった。

クロテアは頬を染めて胸を抱きしめるシロ工を見て、今度はどんな勘違いをしたのやら、プルプルと怒りに震えながら指をビシリと突き付ける。

「あ、あ、あんた、レナン様はともあれ、シロにまで」  
「わしはともあれかい……」  
「クロちゃん、違うの。これは」  
「問答無用！！」

頼むから、俺と問答をして欲しい。  
どうせ聞いてくれないっばいから言わないが。  
クロテアは再び杖を構える。

「立て、下郎……」

ため息を一つ。

そこまで言われたら腹も立つ。

「お前、覚悟をしてるんだな？」  
「は？」

クロテアは整った眉をひそめた。戸惑いがその瞳に混じる。

「人を殺そうとする以上、相手に逆に殺される覚悟を、自分のすべてを失う覚悟をしていると判断するぞ」

固く冷たいものを声に乗せる。

クロテアに背を向けて、テーブルからカップをとり、少し冷めたお茶を飲み干す。

「いや、まて、勇者よ」  
「勇者さま……」

レナンとシロエが、その表情を見て絶句する。

ただの無表情だ。

これから向き合うものを、ただの障害として、なんの感慨もなく排除する時に自然に浮かぶもの。

庭の雑草、道端の石ころ、食べ終わったアイスの棒、使用済みのティッシュ、そんなものを片付ける時と同じ顔だ。

「安い脅しね。私はそんなものに怯みはしない！」  
「そうか、なら好きにしろ」

お互いに向き合つと、クロテアは即座に詠唱を始める。

目を閉じて、華麗に、軽やかに杖を振り回し、よく響くいい声が堂々と呪文を歌う。

そして

「風の乙女　　うひゃうっ!？」

「レナンより有るがシロエよりちよつと小さいな。オレンジか？」

背後にまわってクロテアの胸を揉みしだく俺に、その場の全員が呆然としていた。

## 職業・勇者

時刻はいつのまにか、夜。

朝、異世界に来たらロクに状況も分からないまま、いつのまにか夜。

さて、たった今起こった奇妙な出来事について聞いてほしい。

命を狙って来た敵を無傷で無力化しようと頑張って見たら、横からドロップキックを喰らった挙げ句、敵と観客の二人がかりでタコ殴りにされ、なおかつ正座の上でかれこれ数時間説教が続いている。

あなたなら、どうする？

「最低だった」

「だまれ、エロオヤジ」

「勇者さま、エッチなのは良くないと思います」

世の中何処まで行っても、理不尽だとしみじみ思う。

ちなみに、加害者から被害者に華麗な転身をきめたクロテアは、レナンと二人で俺を散々痛め付けたあと、2階の客室で休んでいる。

「ともあれ、明日になったら城へ向かう。シロも今夜はゆっくり休むとよい」

「はい、レナンさま。お休みなさい。勇者さまも」

「うい、お休み」

シロエはニコリと慈愛の微笑みを浮かべて一礼すると2階へ上がる。

勝手知ったるなんとやら、だろうか。クロテアもシロエも特に部屋を聞いたりはしていない。

「あー、質問が…」

「却下じゃ」

ジロリ、とレナンの冷たい視線が刺さる。

「俺にもメシと寝床を」

「だまれ、エロ親父が！！ 竈の前で灰でもかぶるが良いわ！」

レナンは正座中の俺の目の前で仁王立ちになって腕を組む。

「全くもって嘆かわしい……」

アレか、おぬしの世界では勇者という言葉はエロい意味の隠語かなにかか！？

勇者！ 嗚呼、なんて卑しい職業なんだ！！

とか内心喜びにうち震えたりしておるのか！？

礼儀をわきまえぬは仕方なからう。

あんなふうに限りを知らず魔術を妨害出来るのはある意味賞賛にあたいするじやろう。

じゃが、よりもよって、ち、ち、ち乳モミとは……っ

どうやらレナンの怒りゲージが爆発したようだ。

いきなり俺の襟首を両手でつかんでガクガクと揺さぶりながら叫ぶ。

「……やっぱり乳か！ そんなに大きい乳が好きか！？」

つるぺたは希少価値なんじゃぞ！

ひんにゅーはすてーたすなんじゃー！」

「悪いインターネットに毒されすぎだ！」

怒りのツボはそこらへんだったらしい。

「大体、なんでクロは乳モミで、わしが尻叩きなんじゃ！ 襲うならわしから襲えー！！ さあ襲え！」

「いいから落ち着けっ 首を絞めるな！」

「首くらい、……うえあ！？」

「……」

「……」

沈黙で耳が痛い。

自分が何を言ったのか気が付いたレナンはみるみるうちに耳まで真っ赤に染まり、

「ああああ、何もかもどくしょーっ！」

俺を殴り倒して、自分の部屋へ駆け込んだ。

考察1 あるいは、そのまま乙に溺れて溺死しろ！

「さて」

竈の前に腕枕でゴロリと転がる。

時刻はそろそろ真夜中と言うところか。  
いい加減、真面目に状況を整理してみよう。

ここは森の中の一軒家だ。家というか、二階建ての屋敷だな。  
石と木で出来ていて、窓は木枠にガラスがはまっている。  
外側には、金属製の鎧戸があり、ガツチリ閉じられる。

つまり、だいたい近代レベルの建築技術があるわけだ。

扉の鍵は、中からはツマミを回せば外せるが、外からは鍵を使用せねばならない。これは現代レベルだろう。

そして、台所。

何と、水道がある。

もちろん、金属管の先に蛇口の付いた現代的なものではない。  
シンク代わりの長方形の石の桶に、木の樋といで水が導かれている。  
溢れ出した水は、どうやら下水設備もあるのか、そのまま下に敷かれた玉砂利に吸い込まれるようにして流れていく。

と、いうか恐ろしい事にこの台所は現代のキッチンとほとんど変わらない。

隅にある怪しい模様が描かれた箱はおそらく魔術で冷やす冷蔵庫だし、棚にはガラスのコップや陶器のカップもある。

流石にガスはないようだ、カマドには冷蔵庫と似たような模様が刻み込まれているので、火力調節も簡単なのかもしれない。

壁の何箇所かには燭台しょくだいがあるものの、光っているのは蝋燭の炎ではなく台そのものだった。

どうやら魔術による明かりらしく、俺が寝転がってからしばらくすると順番にゆっくりと消灯して行った。

動作感知式のスイッチかと思わず手を振ったりしてみたが、再び点灯する気配はなかった。

そして次は……

「……あ、勇者さま？」

ガチャリと扉が開く。

同時に、消えた明かりがいくつかぱつと点灯した。どうやら明かりは持続時間切れで消えたわけではないようだ。

目をむければ、そこには純白のネグリジェに身を包んだシロエが寝ぼけまなこで立っていた。衿元を彩る赤いリボンが愛らしい。

そう、衣服の縫製技術なども不釣り合いなほど高い。

きめの細かい織り方をされた柔らかそうな生地は、その内側の盛り上がり盛りあがりを危険なほどに強調している。

まさに双丘と呼ぶにふさわしいそれは、シロエのわずかな身じろぎに反応してたゆんだゆんと揺れるのだ！

そもそも、布を白や黒に染めるには、意外に技術が要るはずだ。

それはそれとして、何という小生意気な乳だ、実にけしからん！

……いかん、ちょっと思考が疾走してしまった。  
オーバードライブ

「こんな所でどうしたんですかあ？」

「寝てる」

シロエは目を擦りながら、寝転がる俺の前を横切って棚からグラスをとって、水を汲んだ。

裾からのぞくスラリと伸びた生足が色っぽい。

「ふふ、またレナンさまと喧嘩ですか？」

シロエはゆるーい笑顔を浮かべると、テーブルについて、コクコクと水を飲みはじめた。

眠いせいか、話し方が幼くなっていて、そこがまた可愛い。

「喧嘩に見えるか？」

シロエは飲み干したグラスを置くと、ふによりと微笑む。

「お父さんが可愛い娘をからかっているようにしか見えなかったですよー」

と、答えると、そのままテーブルに上半身を投げ出すように、突っ伏し、

「ちょっと、うらやましい      かも……」

つぶやくように言うと、そのまま寝息を立てはじめる。

「おいおい、寝るなら寝床行けよ」

返事がない。ただの寝ぼすけのようだ。

「しょーがねえなあ」

立ち上がりシロエの肩を軽く揺する。

「ほれ、起きろって」

何度か揺すってやると、ようやく目を少しだけ開ける。

「だっこ」

「はア？」

「だっこ、して？」

「寝起き悪いな、オイ」

半分眠ったままで、両腕を差し出すシロエに苦笑いをひとつ。

正直に言えば腰にきそうで少し不安だったが、抱き上げてみれば予想外に軽い、というか余裕だった。

レナンも見た目よりかなり軽かったし、もしかしたら、肉体の組成が俺とは少し違うのかも知れない。

ぎゅっと抱き着いてくるシロエは目を閉じたまま、嬉しそうに微笑んでいる。実に無邪気なものだ。

乳を押し付けられるこっちの葛藤など、夢にも気付くまい。

「部屋は、ひとつ目でいいんだな？」

「うん」

階段を上り、ひとつ目のドア。

シロエを左腕で抱き直して開ける。

相手がしがみついている分、片手でも何とかあった。

薄暗い室内に、二つベッドが並び、その間には書き物机らしき家具が置いてある。

「ほら、つい　　わぶっ！？」

そつとベッドに降ろしてやったシロエが、手をのばして俺を引き寄せた。

あっさりバランスが崩され、顔がもろに軟着陸する。  
どこにつて、……たゆん、と。

「……ねー、いっしょに、ねよ？」  
「は？」

待て。

これは明らかにおかしい。  
当たり前だ、寝ぼけてるし。  
いやそうでは無く

「……だめ？」

シロエが俺の頭をぎゅっと抱きしめる。柔らかな膨らみが顔をおしつみ、息が詰まる。

このままじゃまずい。

理性とかじゃなく、生命的な意味で。理性もヤバイけれど。

「おねがい、おとーさん……」

ギクリ、と背骨が固まる。

そのまましばらくすると完全に寝入ったのか腕が緩み、ようやく幸せな地獄を脱出した。

シーツをかけてやる時に足が動いてちらりと白い下着が見えたりもしたが、構わず外へ向かう。

そう、俺は中年だった。

なんとなく雰囲気の流れかけではいたが、こいつらはみんな子供のような年齢ではないか。

背中に冷や水をぶっ掛けられたかのような気分で、すごすごと部屋の外に向かう。

「……ちよつと残念だった、かな？」

扉を開けて、肩越しに振り向いて格好を付けて一言。

このぐらいは許されるだろう

「私は物凄く残念だったわよ？」

「ッ?!」

完全に隙を突かれて廊下に押し出される。

「残念だわ、指一本でも出したら……」  
「ちょ、おまつ!?!」

クロテアはしゅっしゅつと、出刃包丁を素振りしてみせる。  
その瞳はハイライトの消えたいわゆるヤンデレの目だった。  
じつとりとした嫌な汗が背中を濡らす。

「電波的な真似はやめれ」  
「あんた魔術効かないし、仕方ないでしょ?」

だからって出刃包丁かよ!?! とか、猟奇にも程があるぞ!?!  
とか、心の中だけで突っ込んで、なんとか気を取り直し、寢床に  
戻る事にした。

どうせこいつはまともに話を聞かないし。

「じゃー、お休み。せめて、鞘のある刃物にしとけ。手、切るから」  
「夜ばいに来たら刺すわよ?」

「へいへい……」  
「……シロを運んでくれた事には感謝するわ。お休み」  
「へいへ……」

振り向いた時には扉は既に閉ざされていた。

たらたらと階段を降りながら、考察を再開する。

「”出刃包丁”か……」

出刃包丁があるということは。

「  
やっぱり鍛造技術もあるか」

「ご丁寧に、刃紋まで浮かべた柳刃包丁をもとの場所に戻す。

魔術があるせいか、実にカオスな技術レベルの世界らしい。

しかし、これだけの金属加工が出来るなら、人間相手の戦争なら  
そうそう不利になるとは考えにくい。

通常であれば、魔物の戦闘力がズバ抜けている、と判断するところだが……

「魔術の使い方からして、そんなにシリアスな戦いとは思えんよなあ？」

竈の前に改めて転がりなおす。

シロエが来てから点灯していた明かりが再び消えた。

ついでに冷蔵庫や野菜庫をあさって調べてみた食品は、見たことのある物ばかりだった。

味まではわからないので、試しにくすねて来た、不確定名「林檎っぽい果物」を、服で拭ってかじってみる。

「おう、林檎だな」

多少酸味が強いが、間違いなく林檎だった。

とは言え、クッキーなんぞという菓子であるのだから、食べ物については元の世界とほぼ同じと考えてはいたが。

現代でこそクッキーは簡単な焼き菓子だが、それはオーブンが使えたり、バターや砂糖が簡単に手に入るからこそだ。

冷蔵設備がなければ、バターなんぞ保存しようがないし、火力調節の簡単な機械式オーブンだからこそ、焼き加減も自在なのだ。

実のところ世界がユルい分にはなんの問題がない。  
いや、むしろ大歓迎だ。

なんせ、こちらはなんの取り柄もない中年なのだ。  
あまりにハードでダークなファンタジー世界だと、屋敷から出た  
途端ランダムエンカウントで即死しかねないし。

## 優しい真夜中の乙女たち

竈でチロチロと燃える燠火<sup>おきび</sup>は、掛ける物がなくても十分な暖かさを感じさせてくれる。

うとうとしながら踊る火を眺めていると、何やらそれが人型に見えてきた。

バレリーナのように深紅の透ける衣装に身を包んだそれは、クルクルと炎のたなびきに合わせるように踊る。  
すつと通った眉筋の、凜々しくも可愛い少女の姿だ。

「……夢、か？ それとも精霊<sup>たく</sup>の類いか？」

ぼんやりとつぶやくと、それはニコリと微笑んで、より高く舞い、より激しく踊る。

「おう、大したもんだ」

ぱちぱちと手を叩いてやると、それは嬉しそうにますます激しく舞い始める。

どうやら、本物らしい。

なんせ、その踊りが激しくなるのに合わせて、竈の温度もうなぎ登りだ。

「さすがに熱いぞ」

「ごろごろと転がって距離をとると、精霊は踊りを止め、口元に手を当て、ひとしきり楽しげに笑うと、優雅に一礼して消えてしまった。

「どうやら、精霊魔術とでも言う系統も有るようだな。精霊がいるんだし。

それにしても、だ。

「こんだけ攻撃手段が有り余ってるのに、なんで魔物に押されっぱなしなんだか……」

答えの出ぬ問いかけ。

俺はそのままとろとろとした睡魔に溺れて行く。

視界の隅で微笑むのは、精霊か、それとも

「んー？」

やわやわと揉みしだかれる感触に意識が覚醒していく。

夢うつつの錯覚ではなかった。

目を開ければそこはヴェールに閉ざされた天蓋付きのベッドの上で、寄り添うように寝そべった少女が、ゆるゆると手を動かしていた。

「ナニやってんだ、お前？ お？」

軽く脳天にチョップを落とそうとして、指一本動かせない事に気

づく。

「無粋な事を言うでない」

白髪赤眼の少女は、手を止めてのしかかる。  
紅い唇が今にも触れそうな距離で囁く。

「肌を晒した男と女が閨ねやの中じゃ、することはひとつしかあるまい？」

甘い吐息に、脳の奥が痺れるような酩酊感と、炎のような衝動が身体に宿る。

「まあ、そうなんだが」

少女が身体を起こしてまたがった。

ちゅ、くちゅ。

そんな湿った音。熱くぬめった感触。  
少女は潤んだ瞳でこちらを見下ろす。  
まだ、だ。

「何をためらう？ おぬしのこはほれ、この通りではないか」

胸に手をつき、唇を触れる寸前まで近付けて囁く。  
意識を蕩けさせる甘い吐息。

ちゅ、くちゅ…

少女の腰だけがいやらしくなり、とろとろとした汁が擦りつけられる。

「あの二人を気にしておるのか？　ならば案ずる事はない」

その両掌が頬を挟み、紅い瞳がこちらの目を覗き込む。

「ここは魔術的に閉ざされておる。　んっ　はぁ……」

切なげにこぼれる甘い吐息。

少女はふるふると一瞬だけ張り詰め、弛緩する。

「はぁ、はぁ　　見よ、おぬしがあまりに焦らすものじゃから…」

少女は淫らな笑みを浮かべ、細い指先でこちらの胸を撫で回す。

「そりゃあスマン。実のところ、こちらとしてもやる気満々だった  
りするわけなんだが」

当然だろう。

見目麗しい少女が自分に跨がり、腰を振って励んでいるのだ。  
身体がまともに動いていれば、即座に押し倒すのもやぶさかではない。

「ふふ。ならば後は身体で示してくればよいぞ？」

少女は腰を浮かすと、それを握り、自分のそこに当てがった。  
先端が熱い潤みに触れ、じわりと快感が染み込んでくる。

後は、ほんの少し腰を下ろせば

「で、お前誰？」

時が、止まる。

「し、失敬な！ わしは」

「レナンとか言うなよ？」

顔見知りの姿でやると、後で気まずいから止めてくれないか？」

少女は悔しそうに、唇を尖らせる。

「いつ気づきましたか？」

「最初から。色気を出し過ぎたな。あ、性的な意味で」

「不覚です、ミスチョイスでしたか」

「ついでに言えば、お前が何なのかは想像もついてるぞ？」

「……伺いましょう」

「夢魔の類いだろ？」

「ここは夢の中だ。」

淫らな夢を見させて、生命力的なものを奪う。

吐息には性的興奮をもたらす成分か、魔術的何かが有るはずだ。じゃなかったら、普通にキスする場面であんなに勿体ついたりしないだろ？

多分、実体の方もオレの体に接触している状態のはずだ。ブレスを嗅がせにやらんからな」

「成る程。しかし、これが夢だと判断するのは些か早計ではないですか？」

モデルの少女が思い余つてと言う事も

「

「これでも、自分の容姿と人格が、若い異性をメロメロにするかどうか判断がつく程度には歳をとってるさ。H A H A H A……」

「えー、なんだか謝った方が良さそうですか？」

「止めれ！　そこで謝られると、本気で凹むから！？」

望陀の涙を流す俺に、少し引き気味に夢魔がフォローを繰り返してくれる。

かなりいい子ようだ。

レナンとクロに爪の垢を煎じて飲ませたい。

「そ、それにしても素晴らしい判断力ですね。今までそこまで気づいた人間はいませんよ」

「慰めるなつて……　ああ、やっぱり夜な夜な獲物を求めて徘徊するの？」

「失敬な！　淫魔<sup>ビッチ</sup>みたいに言わないで下さい。自慢じゃありませんが、これが初めてです！」

「いだだだっ！？　悪かった！　謝る！　だから乳首抓るのは止まれっ」

むーっと頬を膨らませていた夢魔は、すぐにくすつと笑った。

その姿がにじむようにぼやけ、新しい姿に結像する。

整った輪郭、そこにはめ込まれた切れ長の大きな瞳は、濡れたように艶やかに輝く髪と同じ漆黑。

抜けるような純白の肌をもつ身体は、少女から大人へ成長し始め

たばかりの微妙なラインを描く。

「おう、それ本当の姿か？」

最初からその姿で現れて、ちゅーのひとつでもしてくれたら速攻で魅了されてたな」

「ふふ、ありがとうございます」

満足そうに笑う夢魔の姿は、文句無しに美しい。

「私達の種族は、たしかに貴方の言うような特徴を持ちます。が、最初に交わった相手と死ぬまで共生します」

「共生？」

「はい。私達は快楽を、宿主からは生命力を」

「死ぬまで？」

「はい。宿主が死ぬまで」

まずい。

なんだかよろしくない雰囲気だ。

「あー、もし宿主が死んだら？」

「宿主を変える事はありません。私達も死にます。」

こう見えて一途なんですよ、私達は」

やっぱかー

心で血の涙を流しつつ告げる。

「ゴメン、そう言う事なら無理」

夢魔の表情が凍りついた。

後腐れの無い遊びであつたなら、割り切つて楽しんでしまつただろう。

実際、下半身の方は完全に臨戦体勢。先端に触れる柔肉を蹂躪する時を今か今かと待ち望んでいる。

「オレは魔王との戦争に駆り出されるために異世界から呼び出されたいからな。

朝にはここから出発するし、そうねばいつ死ぬか、死なないまでも元の世界に戻る可能性もある。

それに、オレはそろそろ人生の折り返し地点を通りすぎる年寄りだ。

お前ほどの女なら、若くていい男なんかより取り見取りだろ？

ものすごく残念ではあるが、別のパートナーを探した方が」

「えい」

つぶん。

音にすればそんな感じだろうか？

何か薄いものを破る感触と、腰にかかる一人分の体重。

そして、夢魔は痛みをこらえるように、僅かに震えた。

「すみません、腰が滑りました」

夢魔はやたら嬉しそうに謝った。

幻の閨は消え失せ、キッチンの固い床の上、体勢だけは夢と同じく、しっかりとつながりあっていた。

「えい、とか言つてただろうが!？」

夢魔はゆっくりと身体を倒し、頬を胸に擦り付ける。

「こまけえ事は良いんだよ！　って感じです」

ため息をひとつ。

「好き好んで寿命を短く設定することは無いだろうか？」

ようやく動かせるようになった腕を、その身体にまわす。  
最後に人肌に触れたのはいつだったか。

「貴方は……」

夢魔はこちらの頬を両手で挟み、その漆黒の瞳でまっすぐに見つめた。

「貴方は、貴方が思っているより、ずっとキュートですよ」

心臓がトクン、と脈打つ。

そのまま、どちらからともなく、深く口づける。

「大事なものは、どれだけ生きたかじゃなくて、どう生きたかだと思います」

鎧戸の隙間から、登り始めた太陽の光が僅かに差し込み始めた。

「今日は時間切れですが　」

ちゅ、ともう一度軽くキス。

「短いなら短いなりに、とびきり濃厚に過ごせば良いんです。  
だから、夜な夜な、優しく、たっぷりと、搾りとってあげますね  
？」

夢魔は柔らかい笑みを浮かべ、日の光に溶けるように消えて行っ  
た。

残されたのは……

「どうしろと？」

半裸の中年一人と。

「あと、精霊の癖にそんな目で見るのは止めね。死にたくなるから  
……」

ジITTERとした目で竈の中からこちらを睨む精霊が一人。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1296z/>

---

やさぐれ勇者血風伝 勇者様はオヤジ！？

2011年12月5日20時16分発行